

第四十節の隠された歴史——第二十三番

エゼキエル 第四番号

Jeff Pippenger

2026-08-09

エゼキエルは、「嘆きの預言者」として認められている。なぜなら、彼は十四万四千人の象徴であり、彼らはその書の第九章において、この地と教会において行なわれている忌むべきことのゆえに嘆き（ため息をつき、泣き叫んで）いるからである。前の記事で引用した『証言集』の一節において、ホワイト姉妹は次のように記した。「預言者自身もまた異郷の地における寄留者であった。そこでは、際限のない野心と残忍な残酷さが至上の力を振るっていた。彼が人間の暴虐と不義について見聞きしたことは、その魂を悩ませ、彼は昼も夜も痛切に嘆いた。」

十四万四千人は、「イスラエルの追放された者たち」であり、エゼキエルが捕囚へ連れ去られたことによって象徴されるように、散らされた者たちである。エゼキエル書第九章に示される封印の過程は、黙示録第七章のそれと同一であり、これら二つの章はいずれも末日になされるものとして示されている。

「神のしもべたちへのこの印は、エゼキエルに幻のうちに示されたものと同じである。」『牧師への証』445頁。

御座から、神はケルビムに指図し、彼らが次いで輪を管理する。エゼキエルは、この幻を通して、万事が混乱しているかに見える時期にあっても、神が支配しておられることを理解すべきであった。ホワイト姉妹は、地上の諸事を管理するケルビムに指図される御座の神の構造を提示し、また、キリストが七つの教会の間を歩まれた聖所におけるヨハネを描写した後に、「同様に」と述べている。エゼキエルとヨハネは、靈感の記録するところによれば、「われわれの世界において展開されるべき諸光景は、いまだ夢にも見られていない」時代、すなわち十四万四千人の印を押される時に生きる者たちの象徴である。

確かに、ホワイト姉妹がそれらの言葉を書き記したとき、それらの言葉は真実であった。しかし、封印の時にあって、それらはその完全な成就を見いだすのである。二十年ほど前、今や世界で起こりつつあること、しかもイスラムのいなごの群来と関連して生じていることを、あなたは思い描いたであろうか。黙示録第九章においてイスラムの象徴として示されるいなごには、北アフリカのいなごの自然界における移動が含まれている。アフリカのそれら群がるいなごの移動経路は、イスラムによって占められた地理と一致している。イスラムはイシュマエルの子孫であり、イシュマエルの母はハガルであった。ハガルは「飛行」または「逃れること」を意味する。アラビア語では、その名は通常ハジャル（هجر）と表記され、ヒジュラ（ムハンマドの移住／逃避）を生み出すのと同じ語根に結びついている。イスラムの根源は、いなごの群来との関連をもつだけでなく、その根源には移住という意味も含まれている。違法移民がイスラムのいなごの顕現であるなどと、いったい誰が夢にも思ったであろうか。

世界的共産主義者たちがイスラムの群衆と同盟を結ぶと、だれが夢にも思ったであろうか。イスラムも、またグローバリストの竜の権勢も、それぞれ黙示録9章／11章において底知れぬ穴から上って来るのであり、その底知れぬ穴はサタンの権力の顕現を表している。現在のこの両同盟者は、真理の聖書によれば、いずれもサタンの道具である。

「『彼らがその証言を終えた〔終えつつある〕とき。』二人の証人が粗布をまとって預言すべき期間は、1798年に終わった。彼らがその隠れた働きの終結に近づいていたとき、『底知れぬ所から上って来る獣』として表される力が、彼らに対して戦いを挑むことになっていた。ヨーロッパの多くの国々において、教会と国家における支配権力は、何世紀にもわたって、教皇制を媒介としてサタンによって支配されてきた。しかし、ここにはサタンの勢力の新たな顕現が示されている。」『各時代の大争闘』268頁。

ここでホワイト姉妹は、フランス革命期における社会主義の到来を特定する一方で、サタンが教皇権をも支配していることを指摘している。教皇権もまた、黙示録第十七章において底知れぬ所から上って来るのであり、さらに黙示録第九章では、イスラム教がその底知れぬ所から立ち上る煙である。要点はなおも変わらない。靈感は真に、「この世において演じられるべき光景は、いまだ夢にも見られていない」と意味したのであろうか。イスラム教が今やヨーロッパ全土に広がり、さらに今や南北アメリカに押し寄せつつあることを、だれが夢見たであろうか。国際連合、欧州連合、そしてアメリカ合衆国民主党のグローバリストたちによって、そのいなごが地球全体に広げられることを、あなたは夢見たであろうか。

教育機関が、共産主義とイスラムの同盟によって制圧されることになろうとは、いったい誰が夢にも思ったであろうか。しかもその同盟は、納税したその資金が自国を破壊するために用いられることなど決して意図していなかった市民の税金によって、今や支えられているのである。

いったい誰が、グレートブリテンが、白人の少女たちがイスラムによって集団強姦され、誘拐され、監禁され、殺害されることを推進し、かつそれを容認するようになると夢にも思ったであろうか。人類史上これまで存在したあらゆる共産主義体制が完全な失敗であったという事実を、多くの者が指摘している。しかし、ブリテンの社会主義の結実は、その体制の経済的・政治的哲学の破綻と同様に、社会主義そのものに対する断罪でもある。

地の商人たちが、千七百万人を超える人々の大量殺戮を成し遂げるために、毒物を持ち込むことを許されるなどと、いったい誰が夢にも思ったであろうか。

ジョージ・ソロス、ビル・ゲイツ、アンソニー・ファウチのような者たちが、自らの悪魔的な邪悪の所業を、まったく何の報いも受けることなく成し遂げることが許されるなどと、いったい誰が思い描いたのだろうか。

ホワイト姉妹が、演じられる諸情景は夢にも思われまいであろうと述べたとき、彼女は十四万四千人の印を受ける時の文脈においてそう語ったのである。彼女は、マタイ二十四章におけるキリストの警告についての自らの所見に続けて、次のように記している。「こ

これらの教訓は私たちの益のためである。私たちは神に対する信仰をしっかりと支えとしなければならない。なぜなら、まさに私たちの前には、人の魂を試す時があるからである。キリストは、オリブ山において、御自身の再臨に先立つ恐るべきさばきを詳しく語られた。」

彼女がたった今言及していた教訓とは、聖所におけるエゼキエルとヨハネの両者の例証、すなわち、神が万事を支配しておられることを理解するに至るという例証であった。今まさに進行している混乱と反逆、そして歴史が前進するにつれてただ増大していくほかないその混乱と反逆のただ中であって、神の使者たち——それは、神殿にいるエゼキエルとヨハネだけでなく、イザヤによっても表されているが——は、私たちがいまだ夢にも思わなかった事柄さえなお神の支配の下にあることを理解するのでなければ、主に栄光を帰する仕方では歴史を切り抜けることは決してできない。

他の輪と交差しているそれらの輪には、かつて夢にも思われなかった諸事件が含まれており、それらは9/11に始まった封印の時に生起する出来事である。学ばれるべき教訓は、信仰によって至聖所に入り、契約の箱から輝くキリストとその光を見る者たちによってのみ学ばれる。ダニエル書第十章においてダニエルによって表されているように、その栄光が見られるとき、その光によって益を受ける一群の者たちは、その幻から逃れ去った者たちから分けられる。

「わたしダニエルだけがその幻を見た。わたしと共にいた者たちはその幻を見なかったが、大きな震えが彼らを襲ったので、身を隠そうとして逃げ去った。」ダニエル 10:7.

前回の記事のこの箇所からは、なお多くのことを引き出すことができるが、本稿を閉じるにあたり、一つの輪について取り上げることにする。前回の記事では、数字二十五の象徴性に注目し、その前には数字三十について時間を費やした。エゼキエル書からの光は、単に象徴的な数字にとどまるものではないが、混乱の中からいくらかの明晰さを引き出し始める前に、それらの数的象徴のいくつかにまず親しんでおくことは有益である。

十七

二百五十年の三つの預言は、スミルナ教会の歴史の終わりに始まる十七年間を特定している。313年から330年までの十七年は、獣の像が立てられることを予表している。

紀元前457年に始まった二百五十年は、紀元前207年に終わり、ラフィアの戦いの七年後、パニウムの戦いの十年前に当たる。ラフィアからパニウムまでは十七年であり、それはダニエル書十一章十一節から十五節に示されている、四十節の隠された歴史を表している。

プトレマイオス四世フィロパトル（プトレマイオス四世としても知られる）は、紀元前217年のラフィアの戦いに勝利した統治者であった。彼は紀元前221年から紀元前204年までプトレマイオス朝エジプトの王（およびファラオ）として統治し、したがって、その治世は十七年に及んだ。彼はラフィアの戦い以前に治世を開始したが、パニウムの戦い以前に死去した。

ウクライナ戦争を表象するラフィアの戦いは、2014年に、米国がウクライナにおいてカラー革命を引き起こしたときに始まった。南の王であるプトレマイオス四世はウラジーミル・プーチンを予表している。プーチンは、十四万四千人の封印が2001年に始まる前年である2000年にその統治を開始した。プトレマイオスの場合と同様に、プーチンも、2014年に始まるラフィアの戦いによって表象されるウクライナ戦争に先立って統治を開始した。パニウムに先立ち、プトレマイオスによって予表されるプーチンは取り除かれる。プーチンは2000年に統治を開始したのであり、それゆえ、翌年の2001年に始まった封印の時の始まりと一致している。プトレマイオスによって表象される十七の象徴的な年は、プーチンが統治する期間を示しており、彼は封印の時の期間中にそれを行うのである。

紀元前457年に始まった二百五十年の終結によって表象されるトランプは、プーチンと同じ隠された歴史の中に位置している。その歴史は、ラフィアの戦いに始まる十七年の歴史である。竜（プーチン）と偽預言者（トランプ）は、その隠された歴史の中に位置している。その歴史において、教皇権を象徴する「あなたの民の強奪者たち」として表象される獣は、ラフィアからパニウムに至る十七年の終わりに位置している。

321年はアメリカ合衆国における日曜法を表しており、321年は、313年のミラノ勅令から330年の帝国分裂に至る十七年間の期間内に位置している。

いわゆるヨシヤの大いなる過越から表される歴史は、ユダヤ人の第十七ヨベル周期を開始する。旧約聖書における最大のリバイバルであるヨシヤの過越から十月二十二日に至るまでの歴史は、1840年8月11日から1844年10月22日に至るミラー派の歴史を表すが、さらに重要なことに、それは9月11日から日曜法に至る歴史を表している。十四万四千人の封印の時は、ヨシヤから十月二十二日に至る第十七ヨベル周期によって表されている。十七は封印の時の主要な出来事に結びつけられた象徴であり、また十七という数は、エゼキエルの輪が交差する一点でもある。

ダニエル書第四十節の隠された歴史において、同章十節から十五節に表されているように、竜はプトレマイオスの治世によって「17」という数と結び付けられている。第十一節のラフィアの戦いから第十五節のラフィアの戦いまでの歴史は「17」年である。その歴史は、それら二つの戦いによって表される十七年の中ほどにドナルド・トランプを位置づける。トランプによって合衆国において形成され、据えられる獣の像は、313年から330年までの「17」年によって表されている。第一章第一節において、エゼキエルは「第17」ヨベル周期の第三十年にいる。十七という数が、エゼキエルが至聖所で見た車輪の一つを表していると、あなたは夢にも思ったことがあっただろうか。

エゼキエルは、封印の時において、信仰によって至聖所に入った者たちの象徴である。彼らはペテロの祭司たちである。

あなたがたもまた、生ける石として、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司職となって、イエス・キリストを通して神に受け入れられる霊のいけにえをささげるのです。ペテロ第一 2:5

彼らは、神のかつての契約の民には見えず、聞こえないであろうことをあらかじめ警告されてはいるが、その折にその傍らを過ぎ去られつつある神のかつての契約の民に対し

て、一つのメッセージを宣べ伝えるよう委任されている。

すると彼は私に言われた、「人の子よ、あなたの腹に食べさせ、わたしがあなたに与えるこの巻物であなたのはらわたを満たせ。」そこで私はそれを食べた。すると、それは私の口に甘く、蜜のようであった。彼はまた私に言われた、「人の子よ、イスラエルの家に行き、わたしの言葉を彼らに語れ。あなたが遣わされるのは、言葉の異なる民、ことばの理解し難い民のところではなく、イスラエルの家に対してである。言葉の異なる、ことばの理解し難い多くの民、すなわち、あなたがその言葉を理解できない者たちのところにはではない。もしわたしがあなたを彼らに遣わしたなら、彼らは必ずあなたに聞き従ったであろう。しかし、イスラエルの家はあなたに聞き従おうとしない。彼らはわたしに聞き従おうとしないからである。イスラエルの家はことごとく厚かましく、心が頑なだからである。見よ、わたしはあなたの顔を彼らの顔に向かって強くし、あなたの額を彼らの額に向かって強くした。火打石よりも硬い金剛石のように、わたしはあなたの額をした。彼らを恐れるな。その顔つきに打ちひしがれるな。彼らは反逆の家であるが。」エゼキエル書 3:3-9

エゼキエルは、ミラー派の歴史におけるプロテスタント、および終末時代におけるラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチスト教会によって代表される、かつての契約の民に対して、一つのメッセージを宣べ伝えるよう命じられている。もし彼がそのメッセージを宣べ伝えることを拒むなら、警告を受けないまま残された者たちの血は彼の上に帰せられる。

人の子よ、わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。それゆえ、あなたはわたしの口からことばを聞き、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。わたしが悪しき者に向かって、『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、あなたが彼に警告せず、そのいのちを救うためにその悪しき道から離れるよう悪しき者に告げて警告しないなら、その悪しき者はその不義のうちに死ぬ。しかし、わたしはその血をあなたの手に求める。けれども、もしあなたが悪しき者に警告しても、彼がその悪からも、その悪しき道からも立ち返らないなら、彼はその不義のうちに死ぬ。しかし、あなたは自分のたましいを救ったのである。さらに、もし正しい者がその義から離れて不義を行い、わたしが彼の前に躓きの石を置くなら、彼は死ぬ。あなたが彼に警告しなかったゆえに、彼はその罪のうちに死に、彼の行ったその義は覚えられない。しかし、わたしはその血をあなたの手に求める。それでも、もしあなたが正しい者に、正しい者が罪を犯さないように警告し、彼が罪を犯さないなら、彼は必ず生きる。警告を受けたからである。また、あなたも自分のたましいを救ったのである。エゼキエル 3:17-21。

エゼキエル書の最初の「十一」章において、彼はケバル川のほとり、平野、およびエルサレムにおける幻によって例証された、エルサレムの滅亡を示されている。彼は、エルサレムに臨もうとしているさばきについての警告を宣べ伝えるよう委任される。エルサレムに臨もうとしているさばきについての警告のメッセージは、まずラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会に与えられる警告である。その警告は、神の印を有しないエルサレムの神の民に対するさばきと拒絶とを明らかにする。エゼキエルによって予表されたこの警告は、間もなく到来する日曜法についての警告である。

これらの真理が提示されている最初の十一章において、エゼキエルは口を閉ざされ、その後は神が特にその口を開かれるときにのみ語り、この状態はエルサレムの滅亡に至るまで続き、その時に彼は再び語るができるようになる。

そのとき、霊がわたしのうちに入り、わたしをその足で立たせ、わたしに語って言われた、「行って、あなたの家に閉じこもれ。だが、人の子よ、見よ、彼らはあなたに縄を掛け、それであなたを縛り、あなたは彼らの中に出て行くことができない。わたしはあなたの舌を上あごにつかせ、あなたを口のきけない者とする。あなたは彼らを責める者とはならない。彼らは反逆の家だからである。しかし、わたしがあなたに語るとき、わたしはあなたの口を開く。あなたは彼らに、『主なる神はこう言われる。聞く者は聞け、聞こうとしない者は聞こうとしなくてよい。彼らは反逆の家だからである』と言わなければならない。」エゼキエル3:24-27。

エルサレムが陥落したとき、エゼキエルは再び語るができるようになった。

さて、われわれの捕囚の十二年目、十月の五日に、エルサレムから逃れて来たひとりの者がわたしのところに来て、「都は打たれました」と言った。さて、その逃れて来た者が来る前の夕べに、主の御手がわたしの上にあり、朝、その者がわたしのところに来るまでに、わたしの口を開かれた。それで、わたしの口は開かれ、もはや口がきけない者ではなかった。エゼキエル 33:21, 22。

エルサレムの陥落は、終わりの日におけるラオディキアのセブンスデー・アドベンチスト教会の陥落を表している。その陥落は、第九章においてエルサレムの中で印を押された者たちが、その時、勝利の教会として高く上げられる間に生じる。エルサレムの中にいるラオディキアの者たちは取り除かれ、栄光の王国が確立されるとき、十四万四千人が高く上げられる。その栄光の王国は、十字架における恵みの王国の確立によって予表されていた。十字架における恵みの王国は、日曜法における栄光の王国と対応しており、これら二つの王国は、エゼキエル書の中に見いだされる預言的歴史の連続の中に置かれている。最初の十一章は、エゼキエル書を聖所の文脈の中に置くとき、神の民が、麦と毒麦とから成ると定義される戦う教会から、ペンテコステの麦の供え物から成る勝利の教会へと変えられていく中で、神の教会の清めについて述べている。

また、汝、イスラエルの汚れた悪しき君よ、その日、すなわち咎が終わりに至る時が来た。主なる神はこう言われる。冠帯を取り去り、王冠を外せ。これはもはや以前のままではない。低い者を高くし、高い者を低くせよ。わたしはこれを覆し、覆し、覆す。それは、当然受けるべき者が来るまでは、もはや存しない。わたしはそれを彼に与える。エゼキエル 21:25-27。

ゼデキヤはユダの最後の王であり、彼こそ、この節における「その日の来たるイスラエルの悪しき君」である。ネブカデネザルはまさにエルサレムを攻略しようとしており、ゼデキヤの冠はバビロンによって取り去られることになっていた。さらにバビロンはメディア人とペルシア人によって覆され、次いで彼らはギリシア人によって覆され、さらにギリシアはローマによって覆されることとなる。第三の覆しはローマにおいて到来し、それは「その権利ある者」である王が、十字架におけるその王国の樹立の時に、恵みの王国の冠を受ける歴史なのである。

「『俗悪な悪しき君』に、最後の清算の日が臨んだ。『冠飾りを取り去れ』と主は宣告され、『王冠を脱がせよ』と言われた。キリスト御自身がその御国をお建てになる時に至るまでは、ユダが再び王を持つことは許されなかった。『わたしはこれを覆し、覆し、覆す』——これはダビデの家の王座に関する神の布告であった。『そして、当然それを受けるべき者が来るまでは、もはや存続しない。わたしはそれを彼に与える。』エゼキエル 21:25-27。」『国と指導者』451頁。

生ける者の裁きが9/11に始まったときに始まった後の雨の時代に、キリストはその栄光の王国を打ち立てられる。

「四人の御使いたちが手を放すとき、キリストは御国を打ち立てられるであろう。」Spalding and Magan, 3.

備えの期間は9/11に始まり、日曜法の時に、栄光に輝く聖なる山は、すべての丘と山々の上に高く掲げられる。

アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見た言葉。終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立てられ、丘々の上に高くそびえ立ち、すべての国々はそこに流れ来る。多くの民が行って言う、「さあ、主の山、ヤコブの神の家へ上ろう。主はその道をわれわれに教えられ、われわれはその小道を歩もう」と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。イザヤ 2:1-3.

9/11において、四方の風は解き放たれ、そののち抑えられた。こうして、ダニエル書二章の王国、すなわち山から切り出されて全地を満たす石として表されている王国の樹立の開始が示された。

「この幻は、一八四七年に与えられたものであり、その当時、安息日を守っていたアドベントの兄弟たちはごくわずかであり、しかもその中でも、その遵守が神の民と不信者との間に一線を画するほど十分に重要であると考えていた者はごく少数であった。今や、その幻の成就が見え始めている。ここに言及されている『その悩みの時の始まり』とは、災害が注がれ始める時を指すのではなく、それらが注がれる直前の短い期間、すなわちキリストが聖所におられる間を指している。その時、救いの働きが閉じられつつある間に、悩みは地上に臨み始め、諸国の民は怒るであろうが、それでも第三の天使の働きを妨げないよう抑えられている。その時、『後の雨』、すなわち主の御前から来る回復が与えられ、それによって第三の天使の大声に力が与えられ、また聖徒たちは七つの終わりの災害が注がれる時期に立ちうるよう備えさせられるであろう。」『初期文集』85頁。

キリストは後の雨の時代に御自身の永遠の王国を打ち立てられ、その王国には、十字架において確立された恵みの王国と、日曜法の時における栄光の御国との双方が含まれている。ゼデキヤからバビロン（第一の王国）、メディア・ペルシア（第二の王国）、ギリシア（第三の王国）を経て異教ローマ（第四の王国）に至る流れは、恵みの王国へと至る歴史を示している。その歴史は、教皇制ローマ（霊的バビロン、第五の王国）から合衆国（霊的メディア・ペルシア、第六の王国）、国際連合（霊的ギリシア、第七の王国）を経て、竜と獣と偽預言者の三重の連合に至る、これと並行する歴史的連鎖を示しており、それらが共に現代のローマ（七つのうちのものである第八の王国、すなわち霊的口

ーマ)を構成するのである。

ダニエル書二章におけるその王国の勝利は一つの岩によって象徴されており、神の忠実な者たちは神殿における石なのである。

あなたがたもまた、生ける石として、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司職となって、イエス・キリストによって神に受け入れられる霊のいけにえをささげるのである。
ペテロ第一 2:5

その永遠のものは、この世の諸王国に打ち勝ち、全世界を満たす。エゼキエル書第四十章からその書の終わりに至るまで、同じ王国が、いのちの水をもって全世界を満たす神殿として描かれている。

これらのことについては、次の記事で引き続き扱うことにする。